

平成二十五年 度

和歌山信愛女子短期大学附属高等学校

入学試験問題

国語

受験上の注意

- 一 問題用紙は1と20ページまでです。
開始のチャイムが鳴ったら確認して始めなさい。
- 二 受験番号は、問題用紙と解答用紙の両方に書きなさい。
- 三 終了のチャイムが鳴ったら、問題用紙の上に解答用紙を開いたまま裏返しておきなさい。

（解答は、句読点や記号も一字分と数えて記入すること。）

受験番号

【一】次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

成田空港に降り立ち、素っ気ない空間を入国審査所に向かって歩きはじめるとき、きまつて感じることもある。空間は A 面白くなく無機質だが、なんと B 素晴らしく掃除の行き届いた場所だろうか。床のタイルはどこもピカピカで、床の上で転げ回ってもさして服は汚れないのではないかと思うほど。カーペットを敷きつめた床も清潔だ。仮にシミがあっても、それを除去しようと最善の努力を払った痕跡がある。おそらく掃除をする人は、仕事の終了時間が来ても、モップや掃除機を C さつさと片付けたりしないで、切りのいいところまで仕事をやりおかせて帰るに違いない。 D この丁寧さが、他国から帰ってくると E 切実に感じられる。

1 空港を出てクルマで高速道路を走りはじめてもこの感覚は持続する。田園風景を切り裂いて進む景観に高揚感はないが、路面は鏡の F ように滑らかで、クルマのエンジン音もきわめて静かだ。道路に沿って点灯する街路灯も、どれひとつとして消えていたりはない。

その感慨はやがて都心の夜景に吸い込まれていく。東京に近づくにつれ、夜景の緻密さに感覚が引き締まってくるようだ。ひとつひとつのどの灯りも、切れたり明滅したりはしていない。揺るぎなく灯っている。そんな灯りが集合して高層ビルとなり、果てしない奥行きの中に連なっておびただしい光の堆積をなす。

今の東京の夜景は、世界で一番美しい。そういう感想を漏らすと、異論を唱える人は少なからずいる。夜景はやっぱりムンバイですとか、香港のヴィクトリアピークから見下ろす夜景にはかなわないなどと、うるさ方の意見は百出するけれども、同意してくれる人は意外と少ない。やはり、思い過ごしかもしれないと思いはじめていた矢先、都市をテーマとしたテレビのドキュメンタリー番組で、世界の空を飛び回るパイロットたちの言葉が紹介されていた。

「今、上空から眺めて世界で一番きれいな夜景は東京」

世界の夜景を機上から眺め続けている人々の意見だけに説得力がある。 2 まさに我が意を得た思いがした。世界広しと言えども、東京ほど広大な広がりを持つ都市はないし、信頼感あるひとつひとつの灯りがそういう規模で結集しているわけである。このあた

りに僕はひとつの確信を持つ。

掃除をする人も、工事をする人も、料理をする人も、灯りを管理する人も、すべて丁寧な誠実に仕事をしている。あえて言葉にするなら「繊細」「丁寧」「緻密」「簡潔」。そんな価値観が根底にある。日本とはそういう国である。

3 これは海外では簡単に手に入らない価値観である。パリでも、ミラノでも、ロンドンでも。たとえば展覧会の会場ひとつ日本並みの完成度で作ろうとするなら、その骨折りは並大抵ではない。基本的に何かをよりよく丁寧にやろうという意識がキハクである。労働者は時間がくれば作業をやめる。品質を向上させようという意欲よりもマイペースを貫く個の尊厳が仕事に優先するのであろう。それを前提に、管理する側がほどよく制御して仕事を進めていく。確かに、ヨーロッパには職人気質かたきというものが存在するが、日常の掃除や、展示会場の設営などは、職人気質の及ぶ範囲ではないのかもしれない。さらに言えば、こうした普通の環境を丁寧にしつらえる意識は作業をしている当人たちの問題のみならず、その環境を共有する一般の人々の意識のレベルにもつながっているような気がする。特別な職人の領域だけに、※高邁まな意識を持ち込むのではなく、ありふれた日常空間の始末をきちんとすることや、それをひとつの常識として社会全体で暗黙のうちに共有すること。美意識とはそのような文化のありようではないか。ものづくりに必要なのは、まさにこの「美意識」という感覚資源ではないかと僕は最近思いはじめている。これは決して比喩ひよやたとえではない。ものの作り手にも、生み出されたものを喜ぶ受け手にも共有される感受性があつてこそ、ものはその文化の中で育まれ成長する。まさに美意識こそものづくりを継続していくための不断の資源である。しかし一般的にはそう思われていない。資源といえば、まずは物質的な資源のことを指す。

そもそも、日本は天然資源に恵まれていない。そのため、工業製品を生み出すために「技術」を磨かざるを得なかった。戦後の高度経済成長は、そのような構図でものづくりを進めてきた成果である。世界はそう認識しているし、日本人もそう思ってきた。戦後の日本が得意とした工業生産は「A」、つまり均一にたくさん製品を作ることをきわめて安定した水準で達成することであった。さらに、製品を小型化する凝縮力のようなものがそこに働いて、日本の工業製品の優位をより鮮明に示すことに成功したのである。しかし、もしも日本に豊かな天然資源が存在していたら、今日のような、量を前提とした質に凝縮性が備わった工業製品を作り出すことのできる高度な技術を獲得することはなかったはずである。

しかしながら、ここで言う高度な「技術」とは、言い換えれば繊細、丁寧、緻密、簡潔にものづくりを ^b スイコウすることであり、それは感覚資源が適切に作用した結果、獲得できた技の洗練ではないか。つまり、今日において空港の床が清潔に磨きあげられていたり、都市の夜景をなす灯りのひとつひとつが確実に光を放つことの背景にある同じ感受性が、同一規格大量生産においても働いていたのではないかと考えられる。高度な生産技術やハイテクノロジーを走らせる技術の、まさに先端を作る資源が美意識であるという根拠はここにある。

日本は石油や鉄鉱石という天然資源に乏しい。この事実が歴史の重要な局面でこの国の方針に大きく影響し、第二次大戦に日本が歩みを進めてしまった要因のひとつもここにある。しかし、今日においては、天然資源の確保に ^c 汲々としてきたことがむしろプラスに転じはじめている。もしも日本に石油が豊富に湧き出ていたら、おそらくは自然環境や省エネルギーに対する意識は今日ほどには高まっていなかったはずだ。周囲を海に囲まれ、その大半が山であるという恵まれた自然も、湧き出る石油や排ガスによって後戻りできないほどにぼろぼろに汚染されていたかもしれないし、地球温暖化をもたらす温室効果ガスの排出量規制について、京都で国際会議を主宰する主体性も持ち得ていなかっただろう。むしろ、日本の石油消費や二酸化炭素の排出を抑制すべく、中国やアメリカが必死で説得するような事態を迎えていたかもしれない。マネーという富はもつと巨大にこの国に蓄えられ、医療も、教育も、通信も、^d 全て無料で国が提供するような裕福な国になっていたかもしれないが、その豊かさは、やがて訪れる次の時代に対応できず、悲惨な ^e スイタイを運命づけられていたかもしれない。

こう考えると、⁴ 天然資源がないということは、実は日本にとって幸いなことであつたのだ。天然資源は今日、その流動性が保障されている世界においては買うことができる。オーストラリアのアルミニウムも、ロシアの石油も、お金を払えば買えるのだ。しかし、文化の根底で育まれてきた B は、お金で買うことはできない。求められても輸出できない価値なのである。

冷静に見ると、日本の工業製品は、つましきやエネルギー消費の視点、そして使用者の成熟にともなう製品の洗練という点で、すでに優位性を発揮しはじめている。世界同時不況のせいで少し見えにくくなってはいるが、日本の自動車メーカーがひととき世界一の販売台数を記録したのもその一端である。生活者の意識も、省エネルギーや環境に対する負荷の軽さを前向きに受けとめるようになり、暮らしの、目に見えない中心に、過剰を避け、節度をわきまえていく志向や理性をひそやかに宿らせているのである。

今日、僕たちは、自らの文化が世界に貢献できる点を、感覚資源からあらためて見つめ直してみてもどうだろうか。そうすることで、これから世界が必要とするはずの、つつましさや合理性をバランスよく表現できる国としての自意識をたずさえて、未来に向かうことができる。

生産技術は現在、アジア全域、そして世界全域に等しく広がっていく時代を迎えている。自国におけるものづくりのクウドウ化を憂えている。ヒマはない。多く売るために作れるだけ作るといふ時代が去った今、ものの生産においては、**I** よりも **II** へと、はつきりと重心を移していくことを考えなくてはならない。さらには、工業生産と同時に、恵まれた自然環境にも目を向け、サービスや※ホスピタリティの局面にも資源としての美意識を振り向けていくことが重要である。そうすることで、自然をハイテクノロジーと感性の両面から運用できる、新しいタイプの環境立国として日本はその存在を示していくことができると思うのだ。石油は産しないが、温泉はいたるところに湧き出ている。住まいやオフィスの環境も、※モビリティや通信文化の洗練も、医療や福祉の細やかさも、ホテルやリゾートの快適さも、美意識を資源とすることで、僕らは経済文化の新しいステージに立つことができるはずだ。

中国、そしてインドの台頭はもはや前提として受け入れよう。アジアの時代なのだ。僕らは高度成長の頃より、いつしか GDP を誇りに思うようになっていたが、そろそろ、その呪縛から逃れる時が来たようだ。GDP は人口の多い国に譲り渡し、日本は現代生活において、さらにそのずっと先を見つめたい。アジアの東の端というクールな位置から、異文化との濃密な接触や、※軋轢を経た後のみ到達できる極まった洗練をめざさなくてはならない。

技術も生活も芸術も、その成長点の先端には、微細に打ち震えながら世界や未来を繊細に感知していく感受性が機能している。そこに目をこらすのだ。世界は美意識で競い合ってこそ豊かになる。

(原 研哉『日本のデザイン——美意識がつくる未来』より)

注 ※ 高邁：志などが高く、優れていること。

※ ホスピタリティ：客を親切にもてなすこと。

※ モビリティ：移動性。動きやすさ。ここでは、人やものが空間を移動することを指す。

※ GDP：国内総生産。国内の経済活動の指標。

※ 軋轢：争いあって不和になること。いざこざ。

問一 〓 線部 a～e のカタカナをそれぞれ漢字に直しなさい。

問二 〓 線部 A～F の品詞名を次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。ただし、同じ記号を二度使うことはできません。

ア	名詞	イ	代名詞	ウ	動詞	エ	形容詞	オ	形容動詞
カ	連体詞	キ	副詞	ク	接続詞	ケ	助詞	コ	助動詞

技術も生活も芸術も、その成長点の先端には、微細に打ち震えながら世界や未来を繊細に感知していく感受性が機能している。そこに目をこらすのだ。世界は美意識で競い合ってこそ豊かになる。

(原 研哉『日本のデザイン——美意識がつくる未来』より)

問三 —— 線部1 「空港を出てクルマで高速道路を走り始めてもこの感覚は持続する」とあるが、なぜ「この感覚は持続する」のか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 他国とまったく異なる日本の仕事の丁寧さが、車窓から見える人工的に整備された田園風景やきらびやかな都心の夜景にも表れているから。

イ 都心に向けて高速道路を走るエンジン音のほとんどしない丁寧な作りのクルマに安堵感を覚える一方で、空港と同じような面白みのなさを感ずるから。

ウ 車窓から見える風景にさほど面白みはないけれど、都心に続く高速道路の整備が行き届いており、それを照らす照明も確実に点灯しているから。

エ 素っ気なく面白みのない空間だと感じられる空港と同じような雰囲気、高速道路の鏡のように滑らかな路面や切れ目なく続く街路灯がもし出しているから。

オ 日本のクルマに乗り込んだ瞬間に自分の居場所を確保したという安心感を得ることができ、それに加えて道路それ自体が整然と続いていくから。

問四 —— 線部2 「まさに我が意を得た思いがした」とあるが、「我が意」を具体的に記述している二十字以内の一文を、本文中から抜き出しなさい。

問五 —— 線部3 「これは海外では簡単に手に入らない価値観である」とあるが、ヨーロッパの「価値観」を具体的に表している部分を、解答欄に合うように四十字以内で抜き出し、はじめと終わりの五字をそれぞれ答えなさい。

問六 A に当てはまる言葉を、本文中から十字以内で抜き出しなさい。

問七 ———— 線部4 「天然資源がない」ということは、実は日本にとって幸いなことであつたのだ」とあるが、天然資源がないこと
で日本は何を得ることができたと筆者は考えているか。本文中の言葉を使って、六十字以内で答えなさい。

問八 B に当てはまる言葉を、本文中から四字で抜き出しなさい。

問九 I、II に当てはまる言葉の組み合わせとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア	I・内	—	II・外	イ	I・外	—	II・内
ウ	I・主	—	II・従	エ	I・従	—	II・主
オ	I・質	—	II・量	カ	I・量	—	II・質
キ	I・静	—	II・動	ク	I・動	—	II・静

問十 本文で述べられている内容と合致するものを、次の中から二つを選び、記号で答えなさい。

ア 日本の夜景の素晴らしさには、空港から都心部に向かって走る整備された高速道路を照らす灯りが重要な役割を果たしており、都心部に近づくに連れて光の量が増すことが日本の夜景の美を一層際立たせている。

イ ありふれたひとつひとつの事柄をきちんとするという、日本の人々の日常生活のなかに横たわる細やかな意識こそが、ものづくりに必要な資源としての美意識である。

ウ 周囲を海に囲まれ、大半が山であるという豊かな自然環境を資源として生かしたにもかかわらず、戦後の日本は経済成長という目的に向かってその自然環境を破壊し続けてきた。

エ 日本の得意分野だったものづくりの技術もアジア全域に行き渡り、その優位性を保てなくなってきたという現状を踏まえ、我が国はものづくりから脱却した新たな経済成長モデルを早急に確立する必要がある。

オ ものづくりを日本の産業の中心に据え続けてきた結果として、環境破壊がすすみ、天然資源の枯渇という事態を招いていることは逃れようのない事実として受け止めなければならない。

カ ものを生産することだけにとどまらず、そこに自然環境に配慮する技術とつつましきや合理性の精神をバランスよく加えることで、我が国は世界に貢献できる可能性を秘めている。

【二】次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

岸野からの電話が練習中のスタジオに入ってきたのは、その日の午後八時頃^{ころ}だった。

俺^{われら}達の所在をさんざん捜した挙げ句に、やっとつかまえてくれたものらしかった。

電話を取った工藤^{くどう}は、一瞬、自分の耳を疑った。そして、新藤^{しんどう}と俺^{われら}に、それを告げた。

俺^{われら}達は楽器もそのままに、保雄^{たけお}が運ばれたという新宿の都立病院へタクシーで駆けつけた。

病院へ行くと、萩原^{はぎわら}さんと岸野がいた。岸野は、保雄の詳しい状態を俺^{われら}達に教えてくれた。――

右ひじ、並び右かかとの複雑骨折、および顔を含む全身打撲、腰の骨にはひびが入っているということだった。

お世辞にも軽傷とは言えないが、死ぬよりはよほどましだった。

――自転車が、クツシヨンになってくれたようだ。

岸野が一人言のようにそう言った。

1 翌朝、宝来ビルサービスの事務所には、作業員全員が集っていた。早朝にかかってきた会社からの電話で、呼び出されたものだった。その日の現場は、全て中止、専務の奥田の指示によるものだった。

岸野は、すでに机についていて、やってきた俺^{われら}達を見ると、ご苦労さん、と小さく言った。俺^{われら}達は、長椅子に腰かけたり、空いている社員の机の前に座ったり、たいして広くもない事務所で思い思いに身を置きながら全員がそろいのを待った。保雄がとりあえず無事だったことで、俺^{われら}達の気持ちは幾らか軽かった。何人かが小声で事故の話を交わしたりもしていた。やがて数がそろい、奥田が、俺^{われら}達の前に立った。朝っぱらから、ダブルの背広^{スエット}を着込み、頭をポマードで光らせている。

「おまえらっ、なんで命綱をしないんだっ」

奥田の口から出た最初の言葉は、それだった。

2 俺は一瞬、ぼかん、としてしまった。多分、皆、そうだったろうと思う。言っていることは正当なものだろうが、こんな際の第一声がそれか、という気がした。

結局、その朝、奥田が口にし続けた言葉は、すべてがその調子だった。曰く、労働基準監督署からお叱りを受けた、曰く、同じ元請関連の現場はこの事故のために引き揚げられてしまった。曰く、この一年何とか使わずに済んでいた労災を使うはめになってしまった、要するに、「迷惑だ」、奥田の言いたいのは、ただそれだけのようだった。

X

という気分であんな奥田を見ていた。

世の中には腹黒い奴は無数にいるだろうが、それでも、もう少しは表面を取り繕ってみせるものではないかと思った。何にせよ一人の従業員が重傷を負ったのだ。たとえ上辺だけでも、事故の状況や保雄の状態を説明するものではないのか。それなのに、そこには何もなかった。ただ、いきなり叱責の言葉が飛び出ただけだった。普通なら作業員をねぎらい、その上で注意を促し、裏で抜け目のない締め付けを謀る——まあそんなところではないのだろうか。しかし、その後も会社が失ったものに対する奥田の騒がしい愚痴ばかりだった。

しよせん小物なのだ、と思った。ガキだ、とも思った。

奥田は俺達の前でなお声を張り上げ続けた。そのうち、そうせずにおれないとでもいうように、奥田の騒がしい愚痴は、同じ現場にいた萩原さん個人に、やがて向けられていった。愚痴は、次第に、毒を含み始めていた。

「いい歳をした者が一緒にいながら、どうしてこんなことになるのか、俺には分からん」

奥田は、傍らの長椅子に腰を下ろす萩原さんを視界の隅に置きながら、そう言った。

「四十を過ぎた者にどうせ満足な作業が出来るとは思わんが、それでもそれなりのものを期待して会社は置いているのに、そういう、若い者の規則違反をたしなめることの一つも出来んのなら、そんな者には、いてもらう意味がない」

そして、なんの脈絡もなく、「会社は大損だっ」そう続けた。

もういい加減、みんな、うんざりしていた。岸野の表情にも、それが出ていた。そろそろ復帰しそうだという社長の顔が、俺は

ひどく懐かしく思われたりした。

「いいかつ、仕事というのはなつ、小説なんかを書きながら」

と奥田が、また妙なことを言い始めた時、

「もう、いい」

と萩原さんが、声を上げた。

奥田の傍らの長椅子で、萩原さんは床に目を落とし続けていた。

「……僕の落ち度は、あんたに言われるまでもなく、分かっている。もう、いい」

押し殺すような声で、そう続けた。

「なにを」

と火が点いたような顔で、奥田は萩原さんを睨みつけた。

「萩原つ、おまえ、クビだつ、出て行けつ」

奥田は怒鳴った。

「仕事はな、おまえみたいな奴が、小説なんか書きながら、遊び半分でやれることじゃないんだ、甘ったれるなつ」
そう声を張り上げた。

奥田に、人生観、などというものが、もしあつたとしたら、その言葉に、それは辛うじて映っていたのかもしれない。

なるほど、⁴ そういう考えがあつてもいい。ただ奥田は一つだけ勘違いをしている。窓拭きの会社など、しよせん、奥田の言葉を無理に用いるなら、「遊び半分」の「甘ったれた」奴等^らによって成り立っているということだ。小説を書きながら、ギターを弾きながら、マンガを描きながら、そうしながら現場へ出る者たちによって成り立っているということだ。そしてもう一つ。もし奥田に聞く耳があるなら聞いてほしい。俺達は決して「遊び半分」の「甘ったれた」気分^で仕事をしているつもりはないということだ。仕事は仕事として、ちゃんとやっているということだ。そして本当にやりたいことは本当にやりたいこととして本気でやっている

ということだ。俺達の毎日は、決して、甘ったれた遊びなんかじゃなくて、不安や挫折がいやというほど張り詰めた中を 一本の綱を渡るようにして生きていく ということだ。希望や夢と引き換えに、それを引き受けて生きていくということだ。それをおまえなんかにはガタガタ言われたくないってことだ。 6 舗装された広い道路にふんぞり返っているような、おまえなんかは

俺達は、恐らく初めて、目の前の奥田に強い怒りを覚えた。そして覚えるまま、だれもが怒りを押し殺した目で、奥田を見ていた。

「……そんな話、保雄の事故と、何の関係も、ねえじゃないか」

だれもがムカついている沈黙の中で、そう声を上げる者がいた。

緒方 緒方 だった。

巨きな体を窮屈そうに曲げて、俺の前に座っている。見ると目元が火照ったように紅い。緒方の昂ぶっている時の顔だ。

(あぶないな) と俺は思った。こいつが本気で殴ったりしたら奥田など粉々になっちまう。気味がいいにはいいが、それはそれで、また面倒なことになるにちがいない。

(その時は止めなければ) 俺は少し緊張する思いで体を構えた。(止めて、俺が殴ってやる) ……

奥田は、その緒方を、ジロリと見た。

「何だ、おまえ。いつか萩原にかばってもらった礼のつもりか？ 大事な書類にポタポタ汗を垂らしたのがおまえだってことぐらいは分かっているんだ、 大目に見てやったのに、なんだ、その口のきき方はっ？」

それから奥田は、不快そうに、俺達みんなをねめまわして、こう続けた。

「バンドだの、芝居だの、仕事が終わってそんなものをやってるから、現場で注意散漫になるんだ、事故なんか起こして会社に迷惑をかけることになるんだ、バンドだの、芝居だの、マンガだの、そんな奴は今までも数え切れないぐらいいたがな、その中から一人でもプロの音楽家になった奴がいたか？ 役者でモノになった奴がいたか？ マンガで喰えるようになった奴がいたか？

——ひとりもいやしねえ、才能もないくせに、夢なんて言葉で自分を甘やかしてるだらしない奴等が、ただただただ、おまえら

もそうだ、歌手になるのだから、役者になるのだから、マンガ家になるのだから、そんなくでもない夢を見る前に人並みのことをしろっ、おまえらなんか要するに、世の中の落ちこぼれなんだっ」

ごつ、と鈍い音がして、奥田が突然、後ろの壁に吹き飛んだ。吹き飛んで、ゴン、と壁で頭を打ったと思うと、反動で前に跳ね返り、そのまま床に倒れて顔面を打った。口もとに一筋の血が流れた。

長身の萩原さんが、その前に立っていた。息を荒くして、殴りつけた奥田を見下ろしていた。俺達は、声を失くしたまま、腰を浮かせて、萩原さんを見た。そして床に倒れた奥田を見た。奥田は低いうめき声を上げていた。

岸野が、萩原さんと奥田の間に入り、「萩原さん……」とその胸に両手をあてて、それ以上の行為を制した。

「人間はな」

岸野の肩越しに奥田を見据えて、萩原さんは言った。

「夢を見るから、人間なんだっ」そう言った。

「⁸夢を叶えることよりも、夢を見ることで、人間は人間になれるんだっ、おまえなんかに分かってたまるかっ」

震える声で、萩原さんは言った。その胸に手を当てながら、岸野がつかそうに目を落とした。

(辻内 智貴 『青空のルーレット』より)

問一 〓 線部 a 「なんの脈絡もなく」、b 「大目に見てやった」の意味として適当なものをそれぞれ次の中から選び、記号でなさい。

a 「なんの脈絡もなく」

- ア なんの打ち合わせもなく
- イ なんの面識もなく
- ウ なんの断りもなく
- エ なんのつながりもなく
- オ なんの謝罪もなく

b 「大目に見てやった」

- ア 寛大に対処してやった
- イ 以前から目をかけてやった
- ウ 厳しく注意してやった
- エ 激しく叱責してやった
- オ やさしく諭してやった

問二 〓 線部 1 「翌朝」とは、どのようなことがあった「翌朝」か、説明しなさい。

問三 〓 線部 2 「俺は一瞬、ぼかん、とってしまった」とあるが、その理由を五十字以内で説明しなさい。

に当てはまる言葉として、最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア こんな立派な人が本当にいるのか
- イ こんなひどい奴が本当にいるのか
- ウ こんな思いやりのある人が本当にいるのか
- エ こんなうそをつく奴が本当にいるのか
- オ こんな頑固な人が本当にいるのか

——線部3「毒を含み始めていた」とは、どのようなことを表しているか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 「俺達」従業員を心配しているのにそれを表に出せない「奥田」が、感情を高ぶらせ思わず本音を漏らし始めたこと。
- イ 会社が被った損害に対して文句を言っていた「奥田」が、個人的な好悪から特定の人物に対する批判をし始めたこと。
- ウ 会社に悪い評判が立ったことで「俺達」に腹を立てた「奥田」が、怒りにまかせて会社への愚痴をこぼし始めたこと。
- エ 自分の過失を隠すために「社長」を批判していた「奥田」が、その矛先を「萩原さん」へと向け始めたこと。
- オ 「俺達」従業員を一方的に非難していたはずの「奥田」が、その非難の裏に隠していた優しさを見せ始めたこと。

問六 ——線部4「そういう考え」とは、誰の、どのような考えか。三十五字以内で説明しなさい。

問七 ——線部5「一本の綱を渡る」、6「舗装された広い道路にふんぞり返っている」とは、どのような状態を表現したものか。最も適当なものを次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

- ア 小説やギターにうつつを抜かし、仕事に対して不真面目な「俺達」の状態
- イ 高い収入が手に入る安定した職に恵まれ、何の心配もない「俺達」の状態
- ウ 夢を追う代わりに、危険と背中合わせの日々を送っている「俺達」の状態
- エ 上司の理不尽な要求に対しても、一切逆らうことができない「俺達」の状態
- オ 専務という職にあぐらをかき、仕事に対して不真面目な「奥田」の状態
- カ 命の危険もなく、安定した地位に就き、何の心配もない「奥田」の状態
- キ 安定した職を得る代わりに、夢を抱けないという日々を送っている「奥田」の状態
- ク 正社員だが、いつ倒産するか分からないという不安を感じている「奥田」の状態

問八 —— 線部7「俺達は、声を失くしたまま、腰を浮かせて、萩原さんを見た」とあるが、その理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 萩原さんを止めなければという気持ちはあったものの、一方ではさらに奥田を痛めつけてくれないかと期待したから。
- イ 自分が奥田を殴ろうと思っていたのに、萩原さんに先を越されてしまいどうしてよいか分からなくなってしまったから。
- ウ 自分たちの抱えている思いを理解して行動を起こしてくれた萩原さんに、心の中で拍手喝采を送っていたから。
- エ 萩原さんに殴られた奥田の様子が明らかにおかしく、これはとんでもないことになるのではないかと怖くなったから。
- オ 萩原さんがいきなり奥田を殴るなどとは全く予想もしていなかったので、この事態に驚き呆然としてしまったから。

問九 —— 線部8「夢を叶えることよりも、夢を見ることで、人間は人間になれるんだっ、おまえなんかに分かってたまるかっ」とあるが、そこに込められた萩原さんの気持ちを説明したものととして、最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 夢など叶うわけがないと他人を馬鹿にすることは、絶対に一人の人間としてやってはいけないというもの。
- イ 夢を叶えてしまうと人間は満足し、それを守ることだけに必死になってしまうのでよくないというもの。
- ウ 夢を持ちながら日々努力を重ねることが大切で、それが人間にとっての生の充実につながるというもの。
- エ 夢は叶うことはないどこかであきらめていても、大きな夢を持つことが人間として大切だというもの。
- オ 夢を見ることが人間として生きていくための唯一の条件で、夢を見ない人は人間とは言えないというもの。

【三】次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

今は昔、池のほとりに蝦^{かへる}のあまた集まりて、ア言ふやう、「あはれ生きとし生けるものの中に、人ほどうらやましきものはなし。

われら、いかなればかかる生を受けて、手足をば備へながら、水を泳ぐを能として、陸^{くが}に上がりては、つくばひ居^をり、行く時も

心^aのままに走り行くことかなはず、ただひよくひよくと跳ぶばかりにて早業もならず。いかにもして人のごとく立ちて行くな

らば良かるべし。いざや観音に 1願をかけて、立つことを祈らむ」とて、観音堂に イまゐりて、「願はくはわれらをあはれみ給

ひ、せめて蝦の身なりとも、人のごとく立ちて行くやうにせさせ給へ」とぞ祈りける。まことの心ざしを あはれ^bと 2思し召

しけむ、そのまま後ろの足にて立ち上がりけり。「所願成就^{じやうじゆ}したり」と、喜びて池に帰り、「さらば連れ立ちて歩きて見む」と

て、陸に立ち並び、後ろ足にて立ちて行けば、目が後ろになりて一足も向かふへ行かれず。先も見えねば危なさ言ふばかりなし。

「3これにては何の用にも立たず。ただ元のごとく這^ははせ給へ」と祈り直しけりと言へり。

(浅井 了意『浮世物語』より)

問一 〰️線部ア「言ふやう」、イ「まゐりて」をそれぞれ現代仮名遣いに直し、すべてひらがなで答えなさい。

問二 〰️線部 a 「心のままに」、b 「あはれと」の意味として、最も適当なものを次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。



問三 〰️線部 1 「願」とは、どのような「願い」か。それがわかる部分を、本文中から十字で抜き出して答えなさい。

問四 〰️線部 2 「思し召しけむ」の主語は誰か。本文中から抜き出して答えなさい。

問五 〰️線部 3 「これにては何の用にも立たず」とあるが、その理由を三十字以内で現代語で説明しなさい。

問六 本文の内容と合致するものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 蝦たちは、跳ぶことができるだけではなく、すばやく動くこともできた。
- イ 蝦たちは、手足があるのに水の中でしか暮らせないことがいやだった。
- ウ 蝦たちは、すべての生き物の中で特に人間に憎しみを抱いていた。
- エ 蝦たちは、陸では這いつくばっていなければならぬのが不満だった。
- オ 蝦たちは、人間とくらべて自分たちの寿命が短いことを嘆いていた。

【一】

問一	a 希薄	b 遂行	c 衰退
	d 空洞	e 暇	

問二

A ア	B エ	C キ	D カ	E オ	F コ
-----	-----	-----	-----	-----	-----

問三

ウ

問四

今	の	東	京	の	夜	景	は	、	世	界	で	一	番	美	し	い	。
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

問五

品	質	を	向	上	く	に	優	先	す	る	と	い	う	価	値	観
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

問六

同	一	規	格	大	量	生	産	3点
---	---	---	---	---	---	---	---	----

問七

然	品	量	を	を	前	提	と	し	た	質	に	凝	縮	性	が	備	わ	つ	た	工	業	製
環	境	作	り	出	す	こ	と	の	に	凝	縮	性	が	備	わ	つ	た	工	業	製	自	

問八

感	覚	資	源	問九	カ	問十	イ	カ
---	---	---	---	----	---	----	---	---

【二】

問一

a エ	b ア
-----	-----

問二 保雄が仕事中に事故にあったこと。

問三

を	す	奥	田	が	、	ま	ず	事	故	の	状	況	や	保	雄	の	状	態	を	説	明
口	る	と	思	っ	た	か	ら	る	た	の	に	、	い	き	な	り	叱	責	の	言	葉

問四

イ	問五	イ
---	----	---

問六

も	奥	田	の	、	仕	事	と	い	う	も	の	は	遊	び	半	分	で	で	き	る
の	で	は	な	い	と	い	う	考	え	は	遊	び	半	分	で	で	き	る		

問七

5 ウ	6 カ	問八	オ	問九	ウ
-----	-----	----	---	----	---

【三】

問一

ア	い	う	よ	う	問二	a イ	b ア
イ	ま	い	り	て	問四	観	音

問三

人	の	ご	と	く	立	ち	て	行	く	問四	観	音
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	----	---	---

問五

前	後	に	ろ	進	め	な	い	か	ら	目	が	後	ろ	に	な	っ	て	一	歩	も
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

問六

エ

--